

事業区分	文化芸術事業	育成・創造事業					
事業名	高校生のための演劇ワークショップ事業 ①コミュニケーションワークショップ ②高校生のための演劇スクール						
目的・内容	【目的】 高校新入生を対象にコミュニケーションの習得を目的として、演劇的手法を活用したワークショップを開催することで、これからの時代を生きる子どもたちにとって必要な基礎的能力であるコミュニケーション能力を培う。 【事業計画の柱】 子どもや青少年のための文化芸術体験活動の充実 ①コミュニケーションワークショップ 高校新入生を対象にコミュニケーション能力の向上を目的として、演劇的手法を活用したワークショップを開催することで、これからの時代を生きる子どもたちにとって必要な基礎的能力であるコミュニケーション能力を培う。 ②高校生のための演劇スクール 鳥取県内の高校演劇部員及びその顧問を対象に、高校演劇の第一線で活躍している指導者の指導の下、実際の創作現場を体験しながら県内高校演劇のレベルアップ、人材の育成を図る。						
開催日	①高校生のためのコミュニケーションワークショップ 平成26年5月11日(日)／西部、5月17日(土)／中部、18(日)／東部 講師:西垣 耕造(俳優・東京演劇集団風所屬) ②高校生のための演劇スクール 平成26年12月28日(日)、平成27年1月11日(土)～13日(月・祝) 講師:畑澤聖悟(青森県立青森中央高校教諭・演劇部顧問)						
会場	①高校生のためのコミュニケーションワークショップ 西部地区／ふれあいの里 大会議室 中部地区／倉吉未来中心 リハーサル室 東部地区／とりぎん文化会館 リハーサル室		②高校生のための演劇スクール 倉吉未来中心 リハーサル室 練習室1・2 12/28 倉吉交流プラザ 視聴覚ホール 研修室1・2 1/11～13				
参加費	① 無 料 ② 1,000円						
実施状況	参加者数	①コミュニケーションワークショップ 目標90名(各地区30名) 生徒64名(13校) 顧問14名(9校) ・中部地区 生徒19名(2校) 顧問2名 ・東部地区 生徒11名(4校) 顧問4名 ・西部地区 生徒34名(7校) 顧問4名		②高校生のための演劇School/目標(募集) 30名 生徒 8校 20名 (顧問 12名参加) ※模擬公演来場者 72名			
事業費状況	予算額	収入	30,000円	支出	1,119,000円	収支比率	2.7%
	決算額	収入	20,000円	支出	1,150,589円	収支比率	1.7%
参加者アンケート(主なもの)	①コミュニケーションワークショップ ・様々な学校の人と同じことをして触れ合うことで、仲良くなったり話することができて楽しかったです。仲間意識を持てたり、受け入れ合う空間があったのも嬉しかったし、さまざまな人に対する影響力に感動しました。 ・体を動かしたり、声を出したり、他校の方々と学年を超えて楽しく関わったこと。「演劇の原点」を色々なことを通じて知ることができた。 ・一つひとつのことにしっかりと意味があり、やってみると楽しいのはもちろんですが、楽しみながら学べるのがすごく良かったです。 ②高校生のための演劇スクール ・今回は各高校で環境が違う中、熱意のある生徒が集まり、本場の環境を味わえてよかった。他校の人と高めあえるイメージがあった。 ・県内の高校からの参加ということで、中部のキャストメンバーだけではなく、東・西部の人とも交流できてよかったです。 ・役を演じることが楽しい。とても良い経験になった。 ・全国大会レベルの本と演出に触れることで、演出術や演技、考え方の参考になりました。						
1次評価(内部)	①コミュニケーションワークショップ [成果] ・継続的な事業であるが、演劇部においてはその成果が確実に始めていると感じられる。演劇創造における質もそうであるが、この事業を通しての学校間の連携、生徒同士の目的の共有意識、情報の流通などが認められる。 ・演劇部以外への波及のために、演劇部以外の生徒に演劇的コミュニケーションを学ぶことの意義を少しずつかもしれないが広め始めたばかりである。今年度は演劇部以外から3名の参加があったことは、次年度以降の広がりにつながると感じられる。 [課題等] ・演劇部員においては、特に新入部員をメインターゲットとした事業であり、若干の改善を図りながら基本的にはこの形で事業推進していくことが良いと思われる。 ②高校生のための演劇スクール [成果] ・演劇創造の実践を学ぶ過程の中で、現役の高校演劇部顧問として演劇部を全国大会へ何度も導くなどトップレベルの指導力を持つ講師により、参加した演劇部員は自らの持つ才能を引き出され、それぞれが新たな発見や学びを得ることができた。また他校と合同で行うことにより、お互いに高め合いながら演劇表現の基盤であるコミュニケーション能力や創造力の習得へと繋がった。 [課題等] ・今年度、特に特別支援学校からの参加が2名あったことに大きな意味を感じている。「コミュニケーション」というカテゴリーにおいて通常の生徒と障害を持つ生徒が同じ場を共有したことは社会的意義も大きく、今後の我々財団の方向性を見出すヒントになり得る。(ワークショップ) ・限られた日数の中で、ひとつの戯曲を創り上げていくため、募集人数の設定や戯曲の選定などが課題となる。鳥取県の高校演劇界のニーズに沿って、実施内容に合わせた講師選定を行い、さらなる高校演劇の活性化と、主体的に演劇創造に取り組めるような環境を目指していくことが求められる。						
2次評価(財団評議員)	①コミュニケーションワークショップ ・「演劇を学ぶこと」を主目的として捉えず、人と関わる中でのコミュニケーションの大切さを学ぶ」というコンセプトのもとに行われた今回は、演劇部員以外の参加も募ったが、結果的に4名と少なかったのは残念。次年度以後は本コンセプトを広く打ち出して、幅広い層の参加を促してほしい。 ・演劇部の生徒を中心に募集することはこれまでどおり必要だが、演劇部以外の生徒の取り込みのためには、他の部活動(たとえば合唱、吹奏楽、放送、新聞、文芸)などにも声かけをしてみようか。「演劇」の手法は用いるが、「演劇」という言葉はあえて用いず、「ゲームでまなぶコミュニケーション」などとすれば敷居が低くなるのではないかと。 ②高校生のための演劇スクール ・参加した高校生が日に日に成長しているのが傍目にもわかり、高校演劇のレベルアップ、コミュニケーション能力や創造力の習得などの目的はかなりの程度達成されたのではないかと。学校・顧問の先生方と運営事務局の協力体制ができており、運営はスムーズに進行され、参加する高校生が演劇創作に集中できるためのサポートがしっかりとなされていた。 ・メインキャストとそれ以外の生徒たちの関わり方に差が出てしまったのは残念ではあるが、致し方ない部分でもある。出番の少ない参加者が照明などの運営にも携わることができるようにすれば、演劇の総合的な底上げになるのではと感じた。 ・高校生、あるいは高校顧問へ浸透しており、鳥取県の高校演劇には大きな効果が出ているのと思う。一方で高校演劇自体は小さな世界でもあり、来場者アンケートでも演劇をほとんど観賞していない人が多いことが分かる。鑑賞者を含めて育成する必要があるのではないかと。 ・学校・顧問の先生方と運営事務局とが協力・連携し、ネットワークを活用して、県内高校演劇部の活動を支援育成に寄与している。これは、本事業が継続実施することで事業の認知度を高め、関係者間で信頼関係を構築してきたためと思慮され、今後ともこの体制での継続実施を期待する。						
今後の対応、取組状況	①コミュニケーションワークショップ ・あらゆるコミュニケーションの媒体が増え、人との直接的なかわりが薄れつつある現代において、『相手を支える』『相手を認める』ことを重視し、誰かとつながっていること、相手を意識して感じる、相手を受け入れることで得られる安心感を感じられる場として、大変有意義なワークショップである。次年度以降も演劇部以外の生徒、未参加の学校からの参加を募るにあたり、演劇専門部との共催のあり方をより密なものとし、これまでのワークショップの様子や成果、得られるものなど、分かりやすく各校に伝えていくことなどし、参加を広げていくことが必要である。 ②高校生のための演劇スクール ・平成27年度も高校演劇の関係団体と共催し、日程や講師の選定、実施内容等を状況やニーズに応えながら行うとともに、鳥取県の高校演劇界のニーズに沿って、実施内容に合わせた講師選定を行う。講師が確定した時点で、参加人数や戯曲の選定、参加者の調整については講師と顧問の先生方と対応を協議する。 ・基本的に本事業のスタイルは継続する方向で良いであろう。生徒が入れ替わること、ネットワークの基盤づくりのためにも、継続性を重要視したい。						